

令和2年度 宮崎県産業教育審議会第3回審議会 議事の概要

- 1 日 時 令和2年7月16日（金）14：00～16：00
- 2 場 所 県庁4号館4階 教育委員会室
- 3 出席者

(1) 審議委員

安藤 孝	株式会社食品検査・研究機構 代表取締役
川越 寛	宮崎農業高等学校 校長、宮崎県農業教育研究会 会長
爲山 高志	一般財団法人みやぎん経済研究所 常務理事
松原 和恵	養豚経営（元宮崎県女性農業委員連絡協会会長）
水永 正憲	宮崎県キャリア教育支援センター トータルコーディネーター
和波 拓郎	日本貿易振興機構（ジェトロ）宮崎貿易情報センター 所長
柚木崎千鶴子	公益財団法人宮崎県産業振興機構 みやぎきフードビジネス相談ステーション ステーション長
吉田 陽子	吉田産業株式会社 相談役 中小企業団体レディース中央会 会長

○県教育委員会事務局

副教育長、高校教育課長、課長補佐（総括）、課長補佐（政策）、産業教育担当主幹、産業教育担当指導主事

1	開会のことば
2	教育委員会あいさつ（副教育長）
3	委員紹介
4	委員委嘱 日本貿易振興機構（ジェトロ）宮崎貿易情報センター所長 和波 拓郎 氏 ※定期異動に伴う委員の変更
5	事務局説明 専門委員会経過報告
6	審議
(1) 答申の柱立てについての説明	
委員	<p>答申の構成について説明</p> <p>専門委員会では、これまでの審議会及び専門委員会が出された主な意見をグループ化し、まとめを行い、答申の構成について検討した。</p> <p>「1. はじめに」では、私たちを取り巻く情勢や、今回の諮問の目的について記載をしたい。</p> <p>「2. 本県農業教育の現状と課題」では、農業教育の現状と課題について記載していきたい。</p> <p>「3 本県が求める人財」では、宮崎県総合計画（未来みやぎ創造プラン）や第7次宮崎県農業・農村振興長期計画（みやぎ新農業創造プラン）、みやぎ産業振興戦略、宮崎県教育振興基本計画についてまとめたものを記載していきたい。</p>

	<p>「4 これからの本県農業教育の在り方」については、審議会及び専門委員会から出された意見をまとめたものを記載している。また、項目を2つに大別した。</p> <p>(1) 新学習指導要領に対応した宮崎ならではの農業教育の在り方 (2) 地域や社会の持続的な発展を担う職業人を育成する農業教育の展開</p> <p>大別した項目の中に、キーワードを設けてグループ化している。 本日は、各委員会からの御意見についての変更点や追加事項について御意見を伺いたい。</p>
副委員長	報告についての質問、意見 → なし
委員	<p>資料2の4の教育内容(2)②農業・食とスポーツ・観光に配慮したかもしれないが、これからの新しい時代の農業が目指すべきものは、グローバルとスマート農業と持続可能な3つに加えて、生の農産物を作るだけでなく、加工したり、冷凍したり、それによって農業が様変わりするという意見がある。コロナ禍によって、そういうのが進むのではないか。先日、宮日新聞に掲載された農業専門家ではなく、全く違う企業の経営者の方がいろいろ意見を述べられている中に参考になるものがある。日向のメディキットを創業された会長の中島さんが最初に書かれていたが、明確に農業のこれからの新しい姿がコロナ禍の後に出てくるのではないかという指摘で、生の農産物だけを作って売っただけでは、それが腐ってしまうから安くなってしまふ。これからの将来は、それを粉末にして、様々な形に対応するとか、あるいは冷凍技術が相当進んできているので、冷凍技術を使っていくとか、かなり研究されている分野かもしれないが、そういう視点で新しい時代を予測した上で、教育の中に入れていくと良いと思う。</p>
副委員長	<p>先ほどの委員の意見は、加工的な部分をもう少し入れた方がいいだろうと、これまでの一次産業に加え、二次産業的な部分を宮崎県として入れた方がいいだろうという意見で、(1)もしくは(2)のどこかに入れた方がいいという意見でよろしいか。</p>
委員	<p>フードビジネスのところに該当するのかもしれない。今、県で行われているフードビジネスを超えた方がいいと思う。今のフードビジネスを超えて、コロナ禍によって更に加速された新しい時代の農業の方向のような、もう少し先を見た、今まで取り組まれてきたものを超えた先の取組を入れてはどうか。中島会長の指摘は、非常に参考になる。</p>
委員	<p>今までは、対面で加工食品を販売できていたのが、このようなコロナ禍の中で非対面での販売となると、宮崎のような離れた地域は、ネット販売でやるしかないが、服とか電化製品と違って、食品はウェブから得られる情報だけでは、非常に不安が多い。全国の加工食品がウェブ上でPRを始めたら、宮崎のせっかくの特徴が埋没してしまつて、うまくアピールできないという状況が起きている。このようなことから、フードビジネスを一次加工から二次加工に持っていくというだけではなく、三次のサービスの部分も踏まえて、いかに遠隔の人にアピールできるかということを高校生のうちから学んでおくといいのではないか、若い人の方が得意だと思うので。そのような部分をフードビジネスに盛り込めると、通常のフードビジネスをもう一歩先に進めていくものになると思う。</p>
委員	<p>新聞の記事を読んだが、かなりテクニカルなことが書いてあったと記憶している。先目の線と云われたのは、現状をさらに超えて、もっと他県に先んじて、宮崎が食料生産県であるからこそ、何か新しいテクノロジーとかそういうような意味のことを言われたのだと思った。</p> <p>「フードビジネス」の項目と「農業・食とスポーツ・観光推進」と「食と健康」の3つの食品に関係する部分があるけれども、それぞれの区分が曖昧になっており、もう少し明確に区分できないかと思った。細かい部分では、「食と</p>

	<p>健康」の3つ目のところに、新型コロナウイルスにより、家庭で消費する食品の売上げが上がっており、食品を製造する会社では衛生管理の意識が向上したと書いてあるが、食品を製造する会社では衛生管理の意識が向上したのは新型コロナウイルスが出てきたからではなく、もっと前から国の法律でHACCPが制度化するとか、取引先の要求が非常に厳しくなったりだとか、どちらかという健康よりフードビジネスに入ると思う。そのような社会的な要求の中で、食品の製造企業は衛生管理の意識を向上させなければいけない状況になっている。HACCPという言葉も10年くらい前は、HACCPは大企業がやるもので、小規模の個人事業主は全然言葉さえも知らないという状況だった。今では、飲食店も全部含めてHACCPに取り組むことになっているので、この書き方も実際の社会的な情勢とずれがあると感じた。特に食品製造業に関してはHACCPが中心になってきているが、そういったワードが全く入っていないので、そのような内容を入れてほしい。</p>
委員	<p>第2回の資料で審議の視点として、①②が2つ挙がっていて、答申の柱立てとして柱1、2、3と挙がっているが、本日の資料1や2は、3つの柱をベースに作ったというより、審議の2つの視点で作ら上げたという捉え方でよいか。</p>
委員	<p>今回の資料は、これまでの審議の中で、委員からいただいた率直な意見を、項目ごとに整理したものである。今後は、実際に学校現場でどのように取り組んでいくかを見据えながら、3つの柱に振り分けていく。</p> <p>先程のHACCPに関しては、食品関係の専門委員からの意見であるが、コロナの状況を受けて、これまでよりもさらに、若い従業員達が、自分達で何かをしようとする意識が見られるようになったという話であった。また、県外に出ていた人が、感染の多い首都圏から、地元に戻ってきたいということで、企業を受け直している例もあるようだ。</p>
委員	<p>現時点では、審議の視点から柱立てに行く途中で一端整理したという理解でよいか。</p>
委員	<p>そのような整理です。</p>
副委員長	<p>次の会議には、柱1～3で作られたものが出てくるという想定だが、今日の審議によっては、柱立てを変更することもあり、1、2がそのまま柱立てになるかもしれないので、審議の結果を受けて、作業部会・専門委員会に整理をお願いするというところでよろしいか。</p>
委員	<p>グローバルのことで。まるの3つ目にIT企業やマーケティングの専門家などプロフェッショナルな意見を聞かせて欲しいとあるが、外国と触れる機会を作っていくことが大事だと感じる。私自身、父のビジネスの関係で海外に行った経験があり、世界は、こんなに広いんだと知ったことが、世界に目を向けるきっかけとなった。機械とか他の分野に比べて、農業分野は外国に向けての視点が欠けている人が多く、日本国内の市場を見ている人が多いように思う。そのような中でも、若い方を中心に海外に輸出しようという動きは増えており、その人達に話を聞くと、海外展開は、面白いと言っている。売上げは、それほど上がらないけれど、これまでと同じことを繰り返していくのではなく、新しいことに挑戦して、海外の人の意見を聞いて、商品開発に生かしていく。それが仕事の面白みだと言われる方が非常に多い。</p> <p>先日、焼酎の蔵元の方に出会った。その方から海外展開を始めたが、やはり同じことを繰り返すのでは意味がない。新しいことに挑戦することに意味がある、それが楽しいと話していた。是非、海外に接する機会を取り入れたらいいと思う。</p>
委員	<p>農業高校のカリキュラムの中で、海外との取引をしているとか、海外に行っている農業者の方を呼んで、話を聞くなどの学習機会はどの程度、あるのか。</p>
副委員長	<p>宮崎県の農業教育は、そのような面では遅れている。九州の中でも、佐賀県などは、非常に取組が進んでおり、英語教育を農業高校で中心的にやっているところもあるが、本県はグローバル化については非常に遅れている。そのような中、日南振徳高校には、商業科もあるので、商業科と農業科が連携して、日南</p>

	<p>に来るクルーズ船の外国の方と接するような活動をしている。</p> <p>生徒に直接関わる事ではないが、ベトナムに農業高校がないため、農業高校を作ろうという動きがある。そのための現地の教員養成ということで、昨年度、ベトナムから関係者が宮崎に来られて、学校組織や指導方法についての研修受け入れを、農業高校で行った。そのような動きは少しずつ出てきたが、生徒の活動は、遅れているのが現状である。</p>
委員	<p>海外への視点ということで、本校単独で、昨年、アメリカの高校と姉妹校を締結して、今年から交流を実施するはずだったが、このようなコロナの状況なので、今年度は、実施できなかった。生徒は、非常に残念がっている。本校は、商業科もあるので、インターネットを活用し、アメリカの高校と授業を行っている。例年、アメリカから30名ほどが来校し、交流を行っているが、こちらからは、訪問していなかったため、今年から実施するよう計画していた。再開の目途は、立っている。</p>
委員	<p>普通科高校がSGHなどに取り組んでいるが、農業高校からは少し視点を変えてみてはどうか。宮崎の農業者の中には、グローバルな感覚で、色んなことをやっている人がいっぱいおられる。そのような人に触れさせて、グローバルな視野を喚起、関心を持たせるような取組も面白いと思う。例えば、都農ワインの工場長は、オーストラリアに年1回、今でも行っているようで、現地で研修をし、実際に都農ワインの新しいものをどんどん開発していく。そのような人は農業者の中にいると思う。そのような人たちを軸にして、グローバルにもっと触れさせていく。普通科高校のSGHとは違ったアプローチで農業高校の場合は、実施できる気がする。</p>
委員	<p>大宮高校では、生徒が生き生きと自発的に英語を学ぶ、自発的に研究を進めていくという探究的な活動を5年間続けており、すごく楽しく取り組んでいたが、あのような取組は、国の指定するSSHやSGHなどの、指定が来ない限りは、県立の農業高校が単独で、同じように展開していくことはできないものなのか。</p>
委員	<p>産業教育は、従来から課題研究的な活動を、かなり深く取り組んでおり、全国大会も開かれているため、普通科の探究的な活動より、全体的にかなり先に進んでいる状況にある。ただ、グローバルな視点で海外に出たりとか、海外とつながったりする活動は、あまり見られない。外に使える予算となると、文科省の事業が中心となっており「トビタテ留学 JAPAN」などは、すべての高校の生徒を支援対象としているので、生徒が自分達でプログラムを組んで申請すれば、その生徒に対して支援をしていくことはある。</p>
副委員長	<p>宮崎農業高校の生徒が、5年ほど前に「トビタテ留学ジャパン」で、パンの勉強をするためにオーストラリアに行った実績はあるが、1つの学校が、みんな農業研修として、予算をもらって海外に行こうということは難しいかもしれない。先程の委員の意見のように、色々な工夫によってはグローバルの勉強ができると思う。</p>
	<p>～休憩～</p>
委員	<p>資料1の3ページの経営について。高校生には早いかもしれないが、こういう発想が大切だと思う。イメージとしては、農業で食べていけないという人は少ないが、大変だから継がせたくないという人は、いらっしゃるのではないかな。もちろん経営の視点は大事だが、収入の極大化を目指すのではなく、効率、生産性、投下する自分の労働を考えるような、労働時間当たりの生産性を考えるという力を付けなければいけない。これは、食糧自給率が低い中で、空論かもしれないが。家族経営の農家の方は、働く時間の費用を0と考えているところがあるが、自分が1時間働くことは0ではない。</p> <p>技術的な事は、分からないが、あるキンカン農家を見学していた時に、木の中央部を剪定すると、下の方まで陽が当たるので、下の方の収量が上がると説明を受けた。一方で、隣のハウスは、何も植わっていない状態であった。剪定することによって伸びる生産量、収入と、それにかかる労働力、あるいは、別の施設で作ることと、どれが経営として合理的なのかを考えなければいけな</p>

	<p>い。</p> <p>最盛期のキュウリは、すごく成長が速いので、朝と夕方、必ず収穫しなければならない。このような事が可能であるかは分からないが、例えば、夕方は収穫せずに、朝だけ収穫して品質の落ちたものは、加工するやり方と、朝夕2回収穫するのとどちらが経営として良いことなのか。持続可能性として一番の課題は、後継者や新規就農者などの農業をする人をつくることである。収支ももちろん大事だが、生産性とか投下する労働との関係、収入の増加と労働力の増加のバランスを考えるような発想をしないと収支だけでは後継者は、育たなくなる。そういった観点でスマート農業は、まさにそこにつながってくると思う。そういう観点をどこかに入れるといいと思う。</p>
委員	<p>経営にも関わってくると思うが、P. 4の地域や社会の持続的な発展を担う職業人を育成する農業教育の展開の中で、やはり学習環境や施設設備が大切だと感じる。昔は、農業の現場は、3K（きつい、汚い、危険）、給料も含めて、劣悪な環境が多かった。農業高校の現状として、施設が老朽化しているところがあるが、人間の基本を作る環境は最も大切である。特に、宮崎県は農業大国と言われていながら、農業高校は、だんだんと悪い環境に置かれてきているのではないかと。</p> <p>学習内容に関する大きな議論をすることはもちろん大事だが、子どもたちに夢を持って教育していく、そして、海外の農業大国との交流も行政が費用を支援しながら、そのような機会を作っておける、高校3年間の間にそのような機会があれば、大きく夢が膨らんでいくと思う。だから、最初に設備とか学習環境を作ることが大事であり、2番目に、グローバルな視点を養う海外での農業体験のようなものが大事である、先ほどの委員の意見のように外を見ることは、大事だと思う。</p> <p>私の会社では、海外の高額な設備を輸入する場合、必ず社員を2～3名アメリカなどの現地に行かせる。かなりの費用が掛かるが、直接その会社に行かせて、操作方法やメンテナンスについて、1カ月以上勉強させる。社員に経営者と同じものを見せて、同じものを食べさせて、やる気を起こさせるというのが、社長の考えである。最初は、そこまで大きな費用を使わなくてもいいと思っていたが、結果的に今の会社を見ていると、海外に行き帰ってくると、社員の物の見方が変わってきている。夢や希望が沸いている。旅行なり研修なり、そこに短期でもいいから出せるというのはとても良い体験になると思う。</p> <p>串間に「せとか」という高級みかんを栽培する農家の方がおられる。その経営者の息子さんが、香港に「せとか」を売り込みに行っていた。その方が農業高校を出たかどうかは分からないが、そのような海外への環境を整えながら育てていくうちに、いいものであればどこでも売れるようになるのではないかと。環境を整えて夢を持たせることが大人の大事な役目だと思う。結果的に、儲かるか儲からないかという経営的な面にもつながっていくと思う。</p> <p>もう一人、もともと農協に勤めていたマンゴー農家がおられ、農協でいろんな経験をされている。海外に行ったり、色々な勉強をしたりして、すごくおいしいマンゴーを作っておられる。ハウスは、全部リモコン操作で、スマートフォンで管理している。外から気温の変化を確認したり、温度の調整をしたり、様々な管理ができる。教育の中でも、コロナの時には、リモート教育が行われているが、パソコンやスマートフォンを使った農業が当たり前になっていくと思う。だから、ITを使ったスマート農業の教育など、社会の現状に即した環境を作って、生徒たちに夢を持たせて、広げていく、育てていくということをお願いしたい。学習環境、施設、設備をもっと大きく取り上げていただきたい。</p>
副委員長	<p>情報化について、意見をいただきたい。</p>
委員	<p>コロナの影響で、いろんな場面で対面を避けた。フードビジネス相談ステーションで相談者を受け入れるが、それができなくなって、でも相談者が減ったわけではないというときに、ウェブ面談ができるようなシステムをすぐに整えて、リアルにはできないが、ウェブ面談で対応できるようにやったら、リアル</p>

	<p>面談ほどではないが、電話面談よりはるかに理解できるということを実感した。これから企業が商談をしていく中でも、実際、営業活動で相手先に行くことができない中で、オンライン商談が始まってくる。恐らく、それについて行けないと、実際にビジネスにつながらない事態が迫っている。ウェブ面談でさえも、スマホでも簡単にできるが、それでもなかなかできない方もいるので、今の若い人はそういう部分は長けているのかもしれないが、やはり情報化という部分は、そういう部分も盛り込んでいくと良いと感じた。たぶん、大きく変わってくると思う。</p>
委員	<p>今の意見に同感。特に海外への渡航が全くできない状況なので、実際、今、オンライン商談をやっている。企業が慣れている方でないと、普通でも商談が難しいのに、オンラインの中でいろんな資料を使って説明するというのを、皆さんが現在学んでいる状況なので、学生の時代からそういったコンピュータを使うことにアレルギーがないことが非常に大事。ここに書いてあるのは生産における情報化だとは思いますが、営業という意味でも、例えば、SNSのインスタグラム、フェイスブック、ツイッター等を使って、自社のブランド化を図り、日本や海外を含めて自社の商品をプロモーションしていく考え方、スキルも非常に大事、欠かせない知識技術であると思う。</p>
副委員長	<p>宮崎の農業について意見を伺いたい。学校設定科目として、「宮崎の農業」に取り組んでいる学校もある。約10年前に副読本を作って、それを使って授業をしているので、作り直さなければいけない部分もある。</p>
委員	<p>宮崎の新しい農業の方向性はどんなことが言われているのか。</p>
委員	<p>資料2の3、左から2番目の「第7次宮崎県農業・農村振興長期計画」。昔は儲かるというワード自体を使うことが難しかったが、ここ何年かでようやく儲かるというワードが出てきた。環境に優しくとか、GAPやHACCPなども。右側が6次産業化、農商工連携についてであるが、みやざき産業振興戦略から商業、工業、観光業の視点も参考にしていきたい。</p>
委員	<p>宮崎の農業のイメージとしては、ブランディングに長けていて、生鮮品としてのブランディングは、牛、マンゴー等に非常に効果が出ていると思う。加工の面から考えると、いわゆる加工用原料といったときに、二級品とかB級品のような生鮮品にならない、青果で売れないものを加工用原料に使うという考え方が未だにあって、年間を通してきちんと販売していくためには加工というものが不可欠だと思うので、加工用原料をどう供給するのかということも、今後考えて欲しいと思う。県の農政については、どうなのか分からないので、農政に聞くのがいいと思う。ただ、今回コロナの中でマンゴーとか牛肉とかブランディングで成功している高級なものが売れなくて、皆さん苦労されているという事態もある。トップを狙うことは大事だけれども、トップだけの生産物ではなく、その下の生産物もたくさんあるので、そのことも含めて考えて欲しい。</p>
委員	<p>畜産や施設園芸が宮崎で確立したのは伸びしろがあったから。今は、畜産も施設園芸もほぼ芸術の域まで達しており、今、宮崎の農業で伸びしろが余っているものはないので、どちらかという新しい何か、今までなかったところに畜産を作る、なかったところに施設園芸を導入するというような、その次の伸びしろはもう見つけきれないような状況なので、どちらかという、今、出来上がった畜産や施設園芸を効率よく次世代型に変えていこうというのが、今の宮崎農政の方向性だと思う。唯一宮崎県で伸びしろがあると思われるのは加工。宮崎は生産額では、確かに農業総生産額と食品製造の総生産額だと同じくらいまで来たが、それでも全国から比べると食品製造はまだまだ20位台なので、今から畜産とか施設園芸ほどの伸びしろがあるのは食品加工だろうと思う。そうすると農政だけでなく、商工との連携ということだ</p>

	ろうし、それがもともとの高校教育の中に入っていくと、その伸びしろの部分で唯一残されているところかなと思う。
委員	そのあたりをできれば夢のある構想にして欲しい。これからの新しい50年、100年を見越して、宮崎県の農業は今の食料自給率を高めていくという要請がある。その中に加工を中心として、更に畜産に磨きをかけるとか、夢のある構想が宮崎の次の農業だと高校生たちにも伝えて欲しい。
副委員長	農業高校生は、県内に残る率が高い傾向にあり、宮崎農業では、7割以上が県内に残っている。地域・社会について、意見を伺いたい。
委員	農業大学校は、農業高校から専門的に分かれて勉強していく制度だと思うが、その中で経営とかいろいろなものを学んでいくと思う。農業を好きになって、いいものを作っていくこと。そして、高く売れていくこと。串間はおいしいものがいっぱいできるが、外部の人からは知名度がないと言われる。ということは、販路を拡張する手腕が、組織的にまだまだ足りないと思う。農業高校の基本も大事、そこから繋いでいく農業大学校の教育も大事だと思う。農業大学校の教育をもう一度教えて欲しい。
事務局	農業大学校は8～9割が農業高校の卒業生。2年間の専修学校。農業高校で基礎基本を学んだ生徒が農業大学校に行くと、自分が将来やりたい経営、野菜とか畜産とかを専門的に学びながら経営についても勉強していく。卒業後は、自宅で就農する生徒もいれば、法人等に一旦就職、就農して、家が農家でなければ会社勤めで農業する学生もいるし、実家が農業であればある程度経験を積んで帰ってくる学生もいる。
委員	生産から経営につないでいくことが大事で、収益を上げられるような経営を専門的に学ぶ必要がある。経営的にうまくいかないと継承させられないので、行政からの手厚い応援をしてほしい。
委員	県内の高校生のうち農業高校生の生徒数からすると、かなり配慮されている。教育行政で予算の少ない中で、かなり配慮されている。教育委員会自体の予算に限られた中で、国の補正予算等で頑張ってもらっている。
委員	教育委員会の予算は、どこが管理しているのか。
副委員長	財政課が、調整している。
委員	農業大国宮崎なので。今これだけ農業、農業、と言われている中で、手薄すぎるのではないだろうか。もっと手厚く、具体的にやって欲しいと思う。
副委員長	地域社会のところで意見を伺いたい。
委員	地域社会について、今、若い農業者がとても魅力的。30代の若い農業経営者は必ずしも農業高校出身ではないのでいろんなバランスがあって面白い。そういう人たちをもっと農業高校に来てもらって、農業高校の後輩たちに、農業高校出身の人たちだけじゃなくて、いろんな人たちを農業高校に関わってもらえると良い。魅力的な人が多い。
副委員長	最後、全体を通して、意見を伺いたい。
委員	私のような外から来た人間から見ると、宮崎は素晴らしいところ。イメージは、リゾート、サーフィン、ゴルフ、野球、ラグビー、健康的で明るいイメージがある。宮崎の人はそこまで自信を持ってない人がいる。海外のリゾートのような要素を持っているので、宮崎はいい場所だということを実感して、自信を持って発信してもらえたらと思う。
委員	農業高校で食品加工の専門の学科があって、そこできちんとした大型の加工機械を使って、工場規模の実習施設で加工技術を習得しているというのは実はすごいことである。大学でもそのような学びを行っているところは、限られている。その実践的な加工技術を学べることをもっと大事にしてもらいたい。その中で、HACCPや宮崎らしい農業を展開してほしい。教科書に載っている

	<p>実習をするだけではなく、宮崎の農産物を使って、加工品を作ってもらいたいと思う。教科書どおりになると、宮崎の産物ではなくて、北海道の小豆を使って小豆の缶詰を作るとかになってしまうので、例えば、宮崎のかんきつを使って缶詰を作る実習をやってもらいたいと思う。そのような技術を持って就職することは、企業にとって非常に重要なことで、最新の情報、HACCPや衛生管理、さらに、スポーツやアスリートフード等のいろんな食の可能性を学んで宮崎の企業に就職してもらおうと、すごく宮崎の企業も違う視点で食品開発ができると思う。県内に加工実習室を持っている高校はいくつかあると思うが、すべてを充実させることは難しいと思うので、そうであれば、県内で1つに絞り、食品加工に特化した、更に今よりもレベルの高い加工技術を学べるようなSSHみみたいな学科できるとすごく良いと思う。</p>
委員	<p>インターンシップを深めてデュアルシステムも一部やっているとのことだが、魅力のある農業経営者のところに行って、デュアルシステムで共同研究や共同開発で製品を作るとか、テーマを設定してやるとよいと思う。そこを少し強化してみてもどうか。そのための受入の職場があると思う。若い魅力的な農業者など。</p> <p>グローバルに対応していく、大量生産していくという考え方だけではなく、この地域でとれたブドウで作ったワインはこの地域の食べ物とか人が楽しむのが一番おいしいらしい。宮崎でとれたブドウを原料にして作ったワインをいかにその地域なりの食べ物とあわせて暮らしていくことの魅力が高いかということを実践している農業者がいる。そういうところにデュアルシステムで行って共同開発、共同研究すれば、きっと新しい価値が生まれる気がする。ただ外に売り出す、大量生産するだけでなく、新しい付加価値を生む。地域での暮らしも価値が高まる。デュアルシステムを地元の農業者とやるにはコーディネーターがいるかもしれない。そういう体制を組んでいただいて、展開できると、宮崎の農業高校の実践として面白くなると思う。</p>
委員	<p>側面からの教育、柱3に出ている指導者の育成も大事だと思う。ある高校の先生と話をしたことがあるが、本当にこの先生は知識や熱意があるのかと物足りなさを感じたことがある。</p> <p>卒業した生徒たちは農業経営を実践していくと思うが、それを発信、広報していくことも行政の応援、支援が必要だと思う。今、行政もやっているとは思いますが、まだ物足りなさを感じる。応援をいただきたい。</p>
委員	<p>資料1のP.5、スマート農業で成功した若い農業者を聞いたことがある。その人は親元就農だが、親から「農業の技術は農大校と部会で勉強すれば良いから、工業高校に行け」と言われ工業高校に行った。これもヒントだと思っている。課題として挙げられている2年次からの専攻に分かれるため、1つの分野しか学べないとあるが、これからは、大きく舵を取られる時代ではないだろうか。作物別のカリキュラムは、農業の柔軟性には繋がらないのでは。技術は、高校生が2年間で学ぶには限界があると思うので、経営に繋がるヒントのような加工のこと、輸出のこと、いろんなことを散りばめておいて、あるとき真剣に農業に向き合ったときに、そういうのがあったなあという一般教養的なことを網羅して、幅広い、将来のヒントになる入口を教えていくということが、もしかしたら将来実践的な農業で役に立つのではないだろうか。</p>
委員	<p>資料1について、これまでのいろんな意見を網羅していると思う。</p> <p>柱について、前回の答申の時、3つの柱があるとの話だったが、よくよく読んでみると(1)と(2)の2つできれいにまとまっている。無理に3つ分けなくてもこのままでいい気もする。専門委員会の方で検討いただけたらと思う。</p> <p>資料2の3、いかに本県の農業教育の在り方が県の施策に沿っているのが分かる。これだけ県の施策に沿って人材育成をやっていこうとするわけなので、本当に県庁が宮崎の農業を発展させる担い手を育成したいという気持ちがあるのであれば、既存の予算枠に捕らわれることなく、特段の配慮をしていくべきというのを答申としてあげていいのかどうかは分からないが、これだけの色ん</p>

	なこと、新しいことを行うので、施設的にも先生の面でも、生徒に対する面でも色んな予算を付けていかなければ、これらは、絵に描いた餅になってしまうので、そうならないような配慮をいただければと思う。
(4) 今後の審議日程について	
事務局	資料P6 審議会1回、専門委員会3回。完成に向けて大詰めとなっております。次回は、専門委員会からの答申案について御審議させていただきます。
副委員長	全体を通して質問はないか → なし
5 委員会あいさつ (副教育長)	
6 閉会のことば	